

Title	「沖縄学講座・物外忌記念講座」概要
Author(s)	栗国, 恭子
Citation	浦添市立図書館紀要 = Bulletin of the Urasoe City Library(8): 89-94
Issue Date	1997-03-28
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12001/23327
Rights	浦添市立図書館

「沖繩学講座・物外忌記念講座」概要

栗国 恭子

浦添市立図書館に設置された沖繩学研究室では、図書館利用者に対するレファレンス強化のため、沖繩関係及び中国・アジア関係資料を収集し、利用者に提供している。その活動のひとつに、年16回の沖繩学講座の企画開催がある。

沖繩学講座シリーズには、①市史を読む会（年6回）、②琉球王国評定所文書を読む会（年5回）、③古文書を読む会（年5回）それぞれの目的で3つの性格の講座がある。①の中でも人気が高い講座が、1991年度から毎年、8月13日伊波普猷の命日・物外忌前後に行なわれる物外忌記念講座である。伊波と絡めた現代の沖繩学をテーマに開催している。

伊波普猷の没50年記念の特集に、過去開催された（計6回）講座を紹介する。

(1) 1991年（平成3年度）

「伊波普猷と浦添」

講師：高良倉吉（浦添市立図書館長・歴史学）
期日：10月20日（土）午後2時～3時30分
会場：浦添城址内伊波霊園

1990年に開室した「沖繩学研究室」は、この年の4月に、市立図書館2階の一角に扉を取り付け『琉球王国評定所文書』編集事務局と『浦添市史』事業終了期の成果である市史関係資料及び人材とをあわせた体制で、研究室として実質的な活動を開始した。この年から館長の高良氏（1988年就任）は、「沖繩学研究担当参事兼館長」の役職についている。また高良氏は、前年に沖繩タイムス社がもうけた18回伊波普猷賞（1990年度）を『琉球王

国史の課題』（ひるぎ社）で受賞。

浦添市文化行政において、「沖繩学」の位置付けが明確になったこの年から、図書館主催の伊波普猷関係記念講演会（講座）が開始されている。この年の物外忌を記念して、8月17日に比嘉美津子氏から「沖繩学研究に役立ててほしい」と沖繩学研究室に100万円の寄付があった（『公報うらそえNo.369』）。

その翌月には『公報うらそえNo.370』1990年10月1日、浦添市）紙面で「浦添にねむる“沖繩学の父”伊波普猷」（高良倉吉）や「伊波普猷の浦添研究」（福村光敏・沖繩学研究室囑託）の記事が掲載され、広報活動がなされる。



当時の講演写真記録が無いため、写真は、1994年3月に行なわれた沖繩学講座「沖繩学を考える」の高良氏。

こうした活動の流れからこの年の開催は、8月の物外忌ではなく10月中旬に行なわれた。講演内容は、専門的に絞られたテーマではなく、近代の沖繩出身の郷土学者・伊波普猷の人となり、伊波の浦添関係の研究、伊波霊園のこと、沖繩学についてなど、わかりやすい説明で、市民に伊波普猷を紹介したものであった。

(2) 1992年（平成4年度）

「『言説』としての日琉同祖論」

講師：屋嘉比収（沖縄大学非常勤講師・思想史）

期日：8月15日（土）午後2時～5時

会場：浦添市立図書館視聴覚室

講師の屋嘉比収氏は、琉球大学院を出て、那覇市史編集事務局に勤務するかたわら沖縄大学で近代思想史の非常勤講師を勤めていた（現在・九州大学大学院）。

屋嘉比収氏の講演の内容は、①伊波普猷研究の現状を捉えることにより、沖縄史学における近代史研究の現状を把握した上で②伊波普猷と「日琉同祖論」との関係についてである。

(1)1970年代における、近代史研究は復帰という現実問題との緊張関係において、沖縄史学での優勢を誇った時期である。「琉球処分研究」「旧慣温存」問題が、西里喜行・安良城盛昭論争等の活発な議論が展開されている。80年代に入ると沖縄史学の中心が近世、古琉球のほうに議論の中心が意向、近代史研究が停滞気味になる。このことは今日においても沖縄近代史の一論点である伊波普猷研究に関して、70年代に提示された議論が有効性をもっていることを意味している。

(2)伊波普猷と「日琉同祖論」との関係を今日的に問題定期するために、80年代後半からの新しい歴史学の動きである方法論「（構造）から言説へ」「構造主義から脱構築論へ」の視点を取り組みたいとする。社会に生まれる言説は「①事実の対象と異なり一つの形を表す、②非事実性（事実性も含む）、③匿名による反復性、④言説自体が普遍的な実態ではなく、時代状況に非常に影響される」特徴があると指摘。

それをふまえて「日琉同祖論」を捉えるには、a 事実のレベル、b 思想のレベルに加え



c 言説のレベルの視点が重要だと指摘。つまり従来の「日琉同祖論」の研究では、(A)70年代の歴史学中心の客観的事実へのアプローチ、その後の(B)明治政府における〈官製「日琉同祖論」〉と、伊波を代表とする〈沖縄地元からの「日琉同祖論」〉の展開があったとする大田昌秀の議論、(C)金城正篤・高良倉吉の主張した〈事実〉と〈思想〉との区別を強調した論点、(D)〈事実性〉と〈思想性〉の両方が槍の両面のように補完すると分析した「日琉同祖論」論を展開した新川明ら、の議論があったと紹介した。

屋嘉比氏は、今日における「日琉同祖論」の言説は、近代国家確立・発展のためのイデオロギーだとする捉え方の有効性を主張。日本の行なった朝鮮統治の近代を取り上げ「内朝一体論」を紹介した。

伊波普猷との関わりにおいて、「日琉同祖論」における言説を当時の時間枠でとらえ、①琉球処分から明治30年代のものと②明治30年以降とに区別、②について言語学や人類学の知見によって学問的な色彩をもった〈日本の古代〉という言説は、伊波普猷が代表的であったと指摘した。

屋嘉比氏の捉える伊波普猷の「日琉同祖論」に関しては、本誌掲載の「〈琉球民族〉への視点—伊波普猷と島袋全発との差異—」（屋嘉比）の56P～60Pで詳細に論じている。

(3) 1993年（平成5年度）

「近代沖縄の思想—『沖縄の淵—伊波普猷とその時代』にふれて—」

講師：比屋根照夫（琉球大学教授・日本政治思想史）

期日：8月20日（土）午後2時～4時

会場：浦添市立図書館視聴覚室

講師の比屋根氏は、伊波普猷研究の代表的研究者の一人である。氏は1981（昭和56）年に『近代日本と伊波普猷』（三一書房）を発売し、その中で「時代と生涯」「伊波普猷の思想」を柱に、近代日本の中での伊波の思想的営為を捉えることで日本の「近代化」の在り方を追求している。氏は11回伊波普猷賞（1983年）を『自由民権思想と沖縄』で受賞。

この年に、近代・思想史の研究者・鹿野政直『沖縄の淵』（岩波書店）が発刊された。

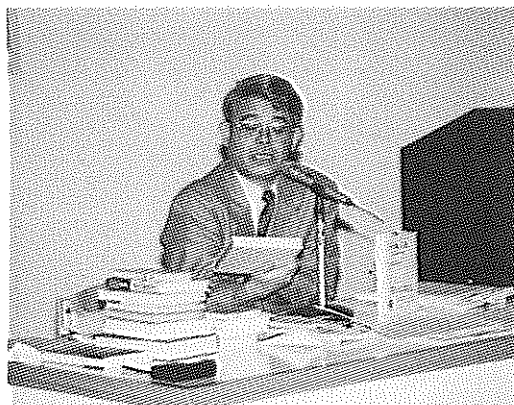
事務局側で、その研究をふまえたテーマを依頼した。

前半に「近代日本の沖縄論の系譜」にふれ、①自由民権期②明治中期—日清戦争前後（太田朝敷の言論活動）③明治末期から大正期（柳田國男、南方熊楠、伊波普猷等の活動）④昭和期・第二次大戦前後（柳宗悦と方言論

争）⑤戦後の五つの時期に区分した。⑤については<歴史学>の分野から遠野茂樹、井上靖、色川大吉、鹿野政直、<社会思想>の分野では、矢内原忠雄、中野好夫、竹内好。そして<文学>での鳥尾敏雄、大江健三郎、大城立裕、<沖縄の思想>の分野での大田昌秀、新川明、戦後世代の仕事等を紹介した。

後半では、戦後の日本史学の分野で活躍する鹿野政直の研究を「鹿野史学に於ける沖縄像」と題して分析紹介した。氏の『戦後沖縄県の思想像』（1987）、『鳥島は入っているか—歴史意識の現在と歴史学』（1988）、『近代日本の民間学』（1983）、『沖縄の淵』の著作の中で<沖縄像>を紹介。「日本の歴史の中であるいは日本人の中で、奄美諸島、琉球諸島）ははじっここのほうだから、落としていいというふうな考え方を是正していかなければならない」とした鳥尾敏雄の思想が一つの啓示になったという鹿野の、日本における近代及び現代という時代を<沖縄>から照射する視点を評価し、比屋根氏も同様なスタンスであると述べた。この講演に向けて比屋根氏は、鹿野氏に「何故沖縄にこだわるのか」との問いを直後のインタビューしたエピソードも紹介された。

研究室では、パネル展示企画「伊波普猷展」が開催（8月13日～9月13日）された。



講演後、沖縄学研究室で参加者から質問を受け懇談。

(4) 1994年(平成6年度)

「伊波普猷『沖縄女性史』の現代的意義
—女性の人権を考える—」

講師：若尾典子(名古屋大学講師：憲法学、
女性史)

期日：8月20日(土)午後2時～4時

会場：浦添市立図書館視聴覚室



講師の若尾氏は、1972～89年まで沖縄で生活。女性史研究からの視点で「沖縄女性史研究への基礎視覚—柳田國男と伊波普猷」(『沖縄文化研究12』1986)、「伊波普猷『沖縄女性史』の現代的意義」(『歴史評論』529、1994)の論文を発表している研究者。

明治・大正・昭和と近代日本の中で庶民に視点をあてた、民俗学者・柳田國男の女性観と、伊波のそれを比較し話を展開。柳田は民俗学の中で、「主婦」の存在を「苛酷な労働下にあるが、現実を采配する重要な地位」だと主張し賛美した。これに対して伊波は「男性問題を通して女性問題を捉え、理想的な主婦像の賛美に偏ることなく、女性の教育論等実践的な問題意義の中で女性史に向き合った」と、柳田と違う啓蒙活動展開等の実践的な研究を評価している。つまり明治・大正期の社会と

女性の問題に対する現状肯定派の柳田國男と現状懐疑の視点から実践的に女性問題に取り組んだ伊波普猷の研究を解説することで、現代の女性の人権問題を考えたいと述べる。また、伊波自身が「沖縄女性史」の論考を発表するなどの女性史問題に取り組む背景には、母や妻や恋人らとの関係で悩む生活人としての伊波の姿があったことも重要な点であったとする。

講座の当日は沖縄の祖先祭祀で重要なお盆(旧盆)の期間であったが、参加者はほとんど女性達。伊波普猷研究では、数少ない女性史の分野で、現代を生きる女性達に関心あるテーマが提供できた講座であった。



講演のテーマにあわせて、研究室の展示コーナーでは「戦前の女性風俗パネル展」(8月9日～約2カ月)を開催した。



(5) 1995年(平成7年度)

「伊波普猷と新おもろ学派」

講師：末次 智(四條畷学園女子短期大学専任講師・琉球、上代文学)

期日：8月12日(土)午後3時～5時

会場：浦添市立図書館視聴覚室

様々な分野の論考を残した伊波普猷の研究業績の中でも、琉球古謡「おもろさうし」の体系的な研究を最初に深めたことは広く知られている。伊波に続き、大正・昭和期「おもろさうし」研究に取り組んだ伊波の後輩の世代である島袋全発、比嘉盛章、宮城真治、世礼国男等が、「新おもろ学派」と呼ばれている。この「新おもろ学派」に関しては、おもろさうし研究の分野でも、研究論考が少ないテーマでもある。

講師の末次氏はおもろさうしと琉球王権の研究論考(『琉球の王権と神話—「おもろさうし」の研究』)をはじめ「世礼国男論序説—その南島歌謡研究の軌跡—(『日本歌謡研究—現在と展望—』)等の論考を発表している「新おもろ学派」に関心を寄せている若手の研究者である。

「新おもろ学派の説明」からはじまり、「新おもろ学派前史」として伊波普猷と①島



袋全発、②比嘉盛章、③宮城真治、④世礼国男のそれぞれの個性ある研究者との関わりを紹介。

「新おもろ学派の出発」の背景として、「沖縄郷土研究会」(1927・昭和2年設立)、島袋全発や島袋源一郎が設立した「南島研究会」(1927・昭和2年)などの地元における郷土研究組織の充実を指摘した。宮城真治は新おもろ学派の名称を「沖縄神歌学会」と記しているとする。この様な伊波のおもろ研究をふまえて独自に、時には伊波への批判も主張しながらおもろ研究に取り組むこのグループの仕事に対して、少々批判的にとらえた東恩納寛博や、期待をかけた真境名安典などのコメント資料も提示。彼らの活動と様々な波紋をおこしたその過激な主張の背景には、比嘉盛章の行動力が大きいと指摘。新おもろ学派の著作目録などの資料も紹介した。また末次氏には、この講座の内容をふまえた「伊波普猷と新おもろ学派—ナショナリズムと郷土=沖縄研究—」の論考を『浦添市立図書館紀要No.7』(1996)に寄稿していただいた。

沖縄学研究室で、展示企画「伊波普猷と新おもろ学派」(8月12日～9月10日)が開催された。新おもろ学派の一人である比嘉盛章の、台湾時代の写真資料と書簡資料が、川平朝申氏の協力により紹介展示された。



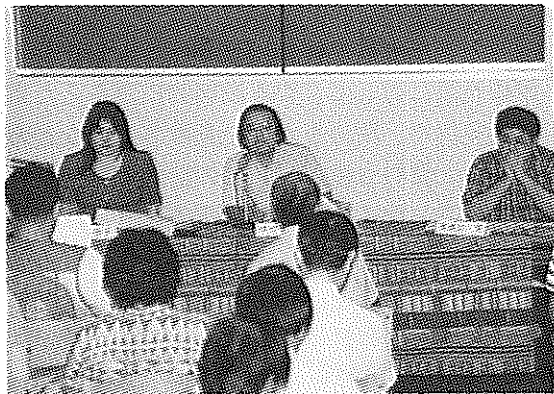
(6) 1996年(平成8年度)

「伊波普猷と近代の言論人
— 普猷を視つめる学識者たち—」

講師：伊佐眞一(琉球大学職員・近代史)
屋嘉比収(九州大学大学院・日本近代
思想史)
栗国恭子(浦添市立図書館沖縄学研究
室嘱託、文化人類学)

期日：8月24日(土)午後2時～5時
会場：浦添市立図書館視聴覚室

明治・大正・昭和期に沖縄学の研究に取り組んだ伊波普猷と、同時期に活躍した沖縄の言論人から、太田朝敷(伊佐)、島袋全発(屋嘉比)、末吉麦門冬(栗国)の3人を取り上げ、伊波との関わり、違い、言論人として何に重きを置いたのか等、それぞれの近代を紹介した。



講師は、『太田朝敷撰集全3巻』(1993～96、第一書房)の編集担当(比屋根照夫共編)の伊佐氏、「人物列伝・沖縄言論の百年<島袋全発>」(『沖縄タイムス』1994年11月21日～95年2月7日)を連載した屋嘉比氏、麦門冬研究で「末吉麦門冬(安恭)と伊波普猷」(『地域と文化No.71』1992、ひるぎ社)等の論考を発表した栗国である。

伊佐氏は、この3人を琉球処分(1879・明治12年)の時期からとらえ、成人であった太田朝敷、その後の新制度の中で精神形成を始めた伊波、日本がアプリオルなかたちで明治40年代に青年期を迎える全発や麦門冬を、3世代の知識人であるとする。こうした世代の違いで沖縄と日本の「国家」に向かいあう態度や心情には違いが生じると指摘。琉球処分は、伊佐にとって、歴史的必然というべき性質のもので歓迎、謳歌したのに比べ、「沖縄改革の急先鋒」といわれた太田は「沖縄が生きていくための唯一の選択肢」と現実的なとらえ方をしていると述べる。沖縄を現実的によどの方向に導くのか、どのような沖縄にするのかといった実践的な課題の前で、太田を経済や政治に重きを置く活動にむかわせたと指摘。そのための思想と言論人であったと位置づけた。

屋嘉比氏は、伊波及びその他の沖縄学における人物研究の資料整理は「沖縄学の群像」を考える上で重要な課題だと強調。「沖縄学の群像」について第一世代を伊波普猷、真境名安興、東恩納寛惇らとすると、第二世代には、島袋全発、末吉麦門冬、伊波月城らが位置付けられるという。両世代に関する研究状況の違いを、第二世代の基礎的研究(著作目録、年譜作成等の資料整備)の遅れが大きな課題であると指摘した。

屋嘉比氏、及び栗国の講演内容は、本誌掲載の「<琉球民族>への視点—伊波普猷と島袋全発との差異—」(屋嘉比)、「伊波普猷と末吉麦門冬(安恭)の交流—明治末期から大正末期にかけて—」(栗国)を参照してほしい。

この講演に関連して「伊波普猷と言論人全3回」が沖縄タイムス紙面(1996年8月21日～23日)で連載された。